



発行 一般社団法人徳洲会 〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階 TEL: 03-3262-3133

制作 一般社団法人徳洲会 広報部 TEL: 03-3268-5580 FAX: 03-3263-8125 Email: news@tokushukai.jp



ALL LIVING BEINGS ARE CREATED EQUAL

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS



号外

徳洲会体操クラブの杉野正堯主将&岡慎之助

パリ五輪体操男子での大奮闘を振り返る

岡は金3個と52年ぶり快挙・杉野も団体金に大きく貢献

体操ニッポンの大活躍に日本中が沸いたパリ五輪。徳洲会体操クラブの杉野正堯主将と岡慎之助は、燦然と輝く金メダルを首にかけ、表彰台でスポットライトを浴びた。両選手は体操男子の日本代表として出場し、団体総合で金メダルを獲得。さらに岡は個人総合と種目別鉄棒でも金メダルの3冠という快挙を成し遂げ、種目別平行棒でも銅メダルを獲得した。杉野は種目別で、あん馬と鉄棒に出場し、それぞれ6位、7位の入賞。同クラブ創設以来、所属選手が五輪の個人総合で優勝したのは初。五輪の体操男子で日本が団体・個人・種目別を同一大会で制するのは52年ぶり、4個のメダル獲得は1984年のロサンゼルス大会以来となる40年ぶりの偉業だ。

世界のトップオフトップが勢ぞろいする実力伯仲の五輪という舞台。勝敗の分かれ目は、いつも紙一重だ。団体総合、個人総合ともに、金メダルの栄誉に浴した日本代表と岡と、銀メダルを獲得した国と選手とのポイント差は、団体総合で0.532、個人総合で0.233という僅差だった。

計画的で豊富な練習、ふだん通りのパフォーマンスを発揮する精神力や平常心、特別な環境のなかでも勝つために必要な自己コントロール、自らを鼓舞する気力など、さまざまな必要条件を満たしながらも、多くのアスリートは金メダルを獲得する十分条件を捉えきれず、競技場を後にする。「勝負は水物」、「勝負は時の運」と言われるゆえんだ。だが、パリ五輪で3冠を達成した岡は、弱冠20歳という若ささを存分に発揮しながら、各種目で完成度の高い、そして極端にミスが少ない演技を完遂した。その結果が3冠につながった。



個人総合の平行棒で会心の演技を見せる岡(写真:AFP/アフロ)



団体総合のあん馬で華麗な演技を披露する杉野(写真:ロイター/アフロ)

兆しは五輪前からあった。パリ五輪体操男子日本代表の内定を勝ち取った5月の第63回NHK杯で、岡は見事に個人総合優勝。徳洲会体操クラブの選手としてNHK杯を制するのは17年ぶりだ。あん馬で落下するミスがあったが、1日目(予選)を1位通過し、2日目(決勝)でも粘り強く安定した演技を披露。あん

馬以外の5種目で、すべて14点台をマークし、一度もトップを譲ることがなかった。パリ五輪個人総合の大舞台では、あん馬は決勝で全体の4位という上位の成績を収めた。修正力の高さが光る。

団体総合の大逆転劇に貢献

五輪団体総合の決勝では、1チーム5選手のうち、各種目(全6種目)で3選手が演技し、その合計点を競った。岡は、ゆか、つり輪、平行棒、鉄棒に出場。ふたりとも、すべて14点台をマークするなど、最終安定した演技を披露。杉野のあん馬は全体で2位タイ、鉄棒は3位タイ、岡のゆかは3位タイと上位の成績を残した。

日本は5種目目の終了時点で、トップの中国に3点以上離される苦しい展開だったが、最終種目の鉄棒で、トップバッターを務めた杉野が着地をびたりと止め、堂々の14.566をたたき出し勢いを付けると、岡も14.433の高得点を出すなどして大逆転。日本は五輪2大会ぶりに頂点に立ち、チームメイト全員で喜びを分かち合う姿が感動を呼んだ。徳洲会体操クラブ所属選手が五輪団体総合で金メダルを獲得するのは、米田功監督が現役選手だった2004年のアテネ大会以来、20年ぶりの快挙だ。

個人総合の決勝では、岡は2種目目のあん馬終了時点でトップに立ち、4種目目の跳馬終了時点には一時順位を3位にまで下げたが、5種

目めに得意の平行棒で15.100の高得点を出し、再びトップに返り咲いた。最終種目の鉄棒でも、全体で2位の14.500という素晴らしい演技を披露。僅差で2位に付けていた選手の逆転を許さなかった。2位の選手には4種目で得点を上回られたものの、得意の種目で確実に高得点を出すとともに、粘り強くミスのない演技を重ね続けたことで、偉業を達成した。

種目別では杉野と岡は、それぞれ2種目に出場。すべて予選を突破し、上位8人が競う決勝に進出した。岡は体操競技の最終日に、まず平行棒で演技。最終の8番目に登場し、着地まできれいに決めると、15.300の高得点で銅メダルを獲得した。同種目で日本がメダルを獲得するのは、04年のアテネ大会以来の快挙だ。

その表彰式から約1時間半後には鉄棒で演技。2目目に登場した岡は平行棒同様、ミスなく着地もびたりと止め、14.533の高得点。3人目の座を明け渡すことはなかった。杉野は8月4日(日付は日本)に行われたあん馬で、ミスなく演技を終え14.933の高得点をマークし6位入賞。岡とともに出場した鉄棒では7位入賞を果たした。

試合後、岡はミスなく演技しきれたことや、一昨年に大けがを負ったが、その時から今大会に向け、しっ

かり準備してきたことが結果につながったと強調。帰国後の会見では「ひざを大けがした際には、多くの方に支援いただいた。それが力となり、今回の結果につながりました。感謝の気持ちを込めた演技ができたと思います」(岡)、「プレッシャーを負う場面で応援の声がひと押し、金メダルを獲得できました」(杉野)と、周囲の助力や応援に謝意を表した。

日本と五輪会場のあるフランスでは7時間の時差があるため、演技時間が日本では深夜だったにもかかわらず、注目度は非常に高く、徳洲会体操クラブのホームページへのアクセスも急増。団体総合決勝のあった7月30日は約5万6,000回(表示回数)、個人総合決勝の8月1日には約20万4,000回(同)、種目別鉄棒決勝の5日には6万7,000回(同)にもなった。

五輪にける強い思い

ふたりともパリ五輪への出場と、そこでの活躍に向け、強い思いを抱いてきた。杉野は前回の東京五輪で代表入りを狙っていたが、最終種目で鉄棒でミスが出て、僅差で落選。目前でチャンスを逃した悔しさをバネに、米田監督と練習計画を何度も練り直しながら臨んだ結果、22年、23年の全日本シニア・マスターズ体操競技選手権大会の個人総合で連覇を果たすなど、結果を出した。

今年の代表選考会で高難度の技を組み合わせた鉄棒と、あん馬の演技

東上理事長が杉野主将と岡を祝福 「体操ニッポンを盛り上げて!」

徳洲会体操クラブの杉野正堯主将と岡慎之助が、徳洲会東京本部でパリ五輪の報告を行い、東上理事長の言葉を贈った。まず「金メダルを持ち帰っていただき、ありがとうございます。米田監督はテレビ番組で解説をされていたが、とても良い解説でした」と3人の健闘をたたえた。「私自身は心配性で、選手の演技を観ていらませんでした。鉄棒から落ちたらどうしよう、あん馬で足を引っかけたらどうしよう、冷や冷やしていましたが、それも乗り越え苦勞でした」と振り返り、「岡選手は20歳ですが、4年後にはきっと日本の中心選手になっていると思います。杉野選手も4年後は29歳ですが、まだまだ現役です」とエール。

さらに「体操競技はけがが多いと思います。オリンピック選手は、恐らく常人以上のトレーニングをして、人間の身体能力を超えたところで頑張っていると思います。岡選手もけがに悩まされたと思いますが、結果は素晴らしいものでした」と祝福した。

最後に、徳田虎雄・名誉理事長の逝去にも触れ、「徳田先生は日本体操協会の会長として、体操ニッポンの復活に尽力されました。今後、日本の体操界は変わっていくと思いますが、米田監督率いる徳洲会体操クラブの未来も、とても楽しみです」と期待を寄せた。

「11月には、待ちに待った新しい体育館である『徳洲会ジムナステクスアリーナ』がオープンします。『国際大会で活躍する一流選手が、トレーニングできる一流の施設をつくってください』と、米田監督に話して建設することになりました。『やっぱり徳洲会はずい』と、将来有望な若い選手が集まる拠点になってほしい。そして、体操ニッポンここにあり』と、盛り上げてほしいと思います」と熱く語った。



団体総合の金メダルを掲げる杉野(中央)と岡(右)(写真:AFP)

構成などが評価され、スペシャリストとして悲願の日本代表入りを果たした。実際にパリ五輪の団体総合では、出場した種目で勢いのある演技を披露し、しっかりと高得点で結果を出し、金メダルに大きく貢献した。

一方、岡は、けがに苦しんだ。一昨年、試合中に前十字靭帯断裂と半月板損傷の大けがを負い、全治8カ月と診断。ほぼ1年間、体操ができなかった。それでも五輪出場を信じ、筋力トレーニングや読書に励むなど心身ともに鍛え上げ、昨年6月、第10回アジア体操競技選手権大会の個人総合で優勝し、復活を遂げた。

五輪開幕前に一般社団法人徳洲会東京本部を訪れた際、岡は「団体と個人で金メダルを狙います」と、さわやかに宣言。きびきびとした正確で美しい演技により、有言実行を果たした。開幕直前には、多くのメディアが五輪特集を組み、そのなかで岡は「ミスなくやること」と強調していた。

実現できない夢はない。これは徳田虎雄・名誉理事長が、自著の副題にもつけた奮起を促す力強い



杉野主将(右)と岡(左)に、花束を贈り祝福の言葉をかける東上理事長(左)。その右は米田監督

徳田虎雄・名誉理事長 体操ニッポン復活に心血 徳洲会体操クラブの原点

徳田虎雄・名誉理事長は日本の医療だけでなく、体操界のレベル向上にも心血を注いだ。相次ぐ病院新設などで多忙を極めていた1996年、アトランタ五輪直後に徳田・名誉理事長(当時)は理事出立。日本体操協会会長に就任。当時、日本の体操界は低迷期にあった。

それまで日本は世界のトップクラスに君臨していた。五輪では52年のヘルシンキ大会から10大会連続でメダルを獲得(日本が不参加だった80年のモスクワ大会は除く)。とくに男子は60~70年代に五輪と世界体操競技選手権大会の二大会で、それぞれ団体総合5連覇(通算10連覇)を果たすなど、無類の強さを示し、「日本のお家芸」と認識されるようになった。

ところが、80年代に入ると強さに陰りが見え始め、ソウル五輪(88年)、バルセロナ五輪(92年)では金メダルはゼロ。その後のアトランタ五輪(96年)では、メダルが獲れず、強さの象徴だった男子団体総合は10位と、日本は同カテゴリーで過去最低の順位を記録した。

こうしたなか、徳田・名誉理事長は会長就任後、旧来の組織体制を刷新するなど協会改革を断行。強い思いで「体操ニッポン」の復活を目指した。また、会長就任から2年後の98年4月には徳洲会体操クラブを創設。朝礼に同クラブの選手を出席させるなど、心身ともに成熟した一流の人材育成に取り組んだ。2001年に会長職を辞したが、その後も体操界を支え続けた。

こうした努力が04年のアテネ五輪で実を結んだ。同クラブの米田功と水鳥寿忠が日本代表に選ばれ、男子団体総合で28年ぶりに栄冠をつかんだ。徳田・名誉理事長はアテネに向かう前の両選手に「金メダルを掴むつもりで鉄棒を掴め」という言葉を贈り、両選手が見事に応えた。

アテネ五輪後、徳田・名誉理事長は「驕れる者は久しからず」。過去の栄光に誇りを持つとともに、絶えず時代の流れに合わせ、先取りした体制をつくり続ける努力をしなければなりません(小紙431号「直言」)と綴っている。水鳥は現役引退後、リオ五輪(16年)からパリ五輪(24年)まで3大会で日本代表監督を務め、男子の団体総合で金メダル2個、銀メダル1個、個人総合で3連覇といった結果を導き出した。

米田は13年に監督として徳洲会体操クラブに戻り、2軍制の導入やジュニア世代への一貫支援など、それまでの体制や方法を改革。低迷していた同クラブを再建し、日本代表に所属選手を送り出した。今年11月には最新の技術・設備を導入した同クラブの新たな活動拠点「徳洲会ジムナステクスアリーナ」が誕生、さらなる飛躍を後押しする。

「体操ニッポンの復活」に尽力した徳田・名誉理事長。その思いは今なお健在だ。



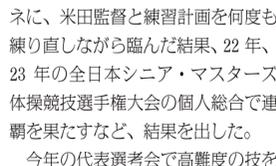
日本体操協会会長も務めるなど、体操界の発展に尽力した徳田・名誉理事長



種目別鉄棒で着地を決めガッツポーズする岡(写真:新華社/アフロ)



岡は種目別鉄棒も同じ3冠の快挙を達成(写真:ロイター/アフロ)



種目別平行棒で獲得した銅メダルを掲げる岡(写真:AFP/アフロ)

パールゴールドに輝く 徳洲会ジムナステクスアリーナ 11月1日OPEN!! 国内最大級の男子体操専用体育館

体操に集中できる環境完備 天然木を使用し大開口を実現 街並みに自然に溶け込む外観



